

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 ZIBIMA Tubodenyefa

論 文 題 目

From ‘Victims’ To ‘Perpetrators’: Oil-Producing Rural  
Communities, Artisanal Crude Oil Refining and  
Environmental Pollution in the Niger Delta

(「被害者」から「加害者」へーニジェールデルタにおける石油  
産出地域コミュニティ、手工的原油精製と環境汚染ー)

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	西川 由紀子
委員	名古屋大学	教授	山形 英郎
委員	名古屋大学	教授	東村 岳史
委員	名古屋大学	准教授	日下 渉

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 論文の概要と構成

ナイジェリアのニジェールデルタでは、原油精製に由来する環境汚染が深刻な状況である。その背景には、ナイジェリア政府が管理するシェルなどの石油企業による原油精製の独占という問題がある。ニジェールデルタの人々は、農業と漁業によって生計を維持していることから、原油精製による環境汚染によって大きな打撃を受けている。したがって、石油企業とコミュニティとの対立は、学術研究でも頻繁に取り上げられている。しかし近年では、ニジェールデルタのコミュニティの人々によって手工的に原油精製が行われるようになったことから、石油企業による環境汚染に加えて、手工的原油精製による環境汚染も確認されている。本論文は、ニジェールデルタのコミュニティによる手工的原油精製に由来する環境汚染に着目し、主に次の二点について解明している。第一に、なぜニジェールデルタのコミュニティにおいて、手工的原油精製がインフォーマルな経済活動として機能しているのか、第二に、なぜ産油コミュニティの人々は、手工的原油精製による環境汚染を許容するようになったのか。

本論文は、6章からなる英語論文である。第1章は、導入、問題提起、意義、調査方法を示している。

第2章では、産油地域における原油抽出について、法的および制度的側面を概観したうえで、先行研究においては、ニジェールデルタ地域における原油精製とそれによる環境汚染について、同地域のコミュニティを資源の所有をめぐる搾取と環境汚染の「被害者」として描かれていることを指摘している。近年増加している手工的原油精製は、資源の所有権と環境汚染をめぐる政府と当該地域のコミュニティ間の対立の質的变化を説明する重要な要因となっており、先行研究による理解では現行の問題を的確に理解するには限界があることを指摘している。

第3章は、ニジェールデルタにおける石油抽出の歴史、同地域における石油資源の所有権をめぐる闘争、コミュニティによって行われる手工的原油精製について説明している。その過程では、ニジェールデルタのコミュニティが環境に依存する（農業と漁業を中心とする）生活様式であり、環境汚染の悪化につれて生計が立ち行かなくなった経緯をまとめている。

第4章では、現地調査で得られた情報をもとに、なぜニジェールデルタのコミュニティにおいて、手工的原油精製がインフォーマルな経済活動として機能しているのかについて考察している。手工的原油精製が、経済活動として機能する背景には、現地コミュニティの石油産業に参画する起業家的趣向があり、政府による利潤分配のメカニズムの歪みが、市場の開拓と需要をもたらしたことを指摘している。加えて、手工的原油精製が、コミュニティ内のネットワークにより支えられていることも重要な点として挙げている。

第5章では、手工的原油精製による環境汚染に関するコミュニティの認識について解明している。現地調査によるデータから、コミュニティの人々は、石油企業による環境汚染に対する不満が大きい一方で、手工的原油精製による環境汚染に対しては、そうではないことが明らかにされた。コミュニティが手工的原油精製による環境汚染に対して特段の懸念を示さない理由として次の二つの要因を挙げた。第一は、手工的原油精製を行う個々人の経済的関心である。手工的原油精製に伴う環境汚染は、生計を維持する為に必要であると考えられており、石油企業による環境汚染を規制できなかった制度

# 論文審査の結果の要旨

的な失敗と、それによる生計への影響による帰結と説明している。第二に、国家と石油企業の原油精製によって、長期にわたって環境が汚染されたという集団的経験が、ネットワークの形成と維持を可能にしていることを指摘している。第5章の後半では、環境問題を取り上げる非政府組織（NGOs）と、ニジェールデルタ地域のコミュニティの環境に対する懸念に関する根本的な違いについて説明している。NGOsは、環境そのものに対する懸念と持続性の観点から環境問題を取り上げているのに対し、ニジェールデルタのコミュニティは、実存する社会経済的状況に由来する懸念から環境問題を取り上げていることを指摘している。最終的にコミュニティによる環境に対する懸念は、NGOsによる環境アドボカシーの道具として機能し、コミュニティとNGOsによる協力へとつながることも指摘している。

第6章は終章で、コミュニティが環境汚染による「被害者」から、環境汚染の「加害者」であり受益者へと変遷したことを再確認している。また、コミュニティの反応の変化によって、環境の悪化が、最終的には、コミュニティの持続性と生き残りに深刻な影響をおよぼし、貧困の悪循環をもたらすことになる」と指摘した。尚、4章から6章で明らかにされた内容は、学術論文として発刊されている。

## 2. 評価

本論文は、ナイジェリアのニジェールデルタ地域で悪化する環境問題と、それに関係するコミュニティと石油企業、さらにナイジェリア政府との関係について考察するにあたって一定の貢献をするものである。学位論文として以下のように評価すべき点を含んでいる。

1) ナイジェリアのニジェールデルタにおいてみられる石油企業、その背景にあるナイジェリア政府と同地域のコミュニティの人々との関係について、最新のデータを用いて検証し、当該地域のコミュニティを「被害者」としてのみならず、「加害者」であり受益者として捉え、その変化の背景にある問題と、それが維持される力学を解明した。

2) 先行研究ではほとんど触れられていない「加害者」としてのコミュニティについて、その背景にあるコミュニティの認識がいかなるものかを解明することによって、ニジェールデルタ地域のコミュニティが直面している問題のみならず、石油輸出に依存する国家（ナイジェリア）の資源ガバナンスを問い直す必要性を提起した。

ただし、本論文は以下のような不十分な点も含んでいる。

- 1) ニジェールデルタのコミュニティ間に存在するであろう権力関係や対立関係、手工的原油精製の機会不平等については、十分に触れられておらず、手工的原油精製の拡大にともない、どのような影響があるのか、より深く検討すべきである。
- 2) 環境汚染をめぐるニジェールデルタ地域のコミュニティと、環境問題に取り組む非政府組織（NGOs）との協力的関係について、双方が異なる視点を持ちながらも協調していることが説明されているが、NGOsに関しては、一次資料にもとづく説明ではない。

ただ、本論文は、取得可能な最新のデータをもとに検証した結果を得ているわけであり、博士論文としての価値を損なうものではない。上記の点については、データの改善、より詳細なデータ入手が

## 論文審査の結果の要旨

なされた際の今後の課題であるといえよう。

### 3. 結論

以上の評価より、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものである。